

の左右に切り込みを入れたもの。

009型式

長方形の材の一端を羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。

051型式

長方形の材の一端を尖らせたもの。

003型式

長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

012型式

用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

005型式

用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

002型式

折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

001型式 削屑。

なお、中世・近世の木簡については、以上の型式番号に適合しないものが多いので、註記を省略する場合がある。

一、この凡例は木簡出土事例報告に関するものであり、論文などにおいては、必ずしもこれを用いるものではない。

一、英文目次は天理大学のW・エドワーズ氏にお願いした。

木簡学会役員（二〇〇七・二〇〇八年度）

会長		副会長		委員		監事		評議員	
栄原永遠男	田辺 征夫	館野 和己	榊木 謙周	鐘江 宏之	佐竹 昭	今泉 隆雄	西山 良平	石上 英一	岡村 道雄
菅原 浩幸	坂上 康俊	鷺森 浩幸	佐藤 信	鈴木 景二	角谷 常子	吉川 真司	渡辺 晃宏	狩野 久	小谷 博泰
鶴見 泰寿	土橋 誠	馬場 基	寺崎 保広	山本 崇	古尾谷知浩	山本 崇	吉江 崇	佐藤 宗諄	清水 みき
山本 崇	山中 章	吉川 真司	渡辺 晃宏	今泉 隆雄	西山 良平	石上 英一	岡村 道雄	佐藤 宗諄	山中 敏史
和泉 英一	勝山 清次	狩野 久	小林 昌二	平川 南	東野 治之	和泉 英一	李 成市	和泉 英一	和泉 英一

二〇〇七年出土の木簡

概要

本号には、昨年度の研究会で「二〇〇七年出土の木簡」として報告されたものを中心に、七七件の遺跡から出土した木簡を収載することができた。このほか、「一九七七年以前出土の木簡」として一件、「釈文の訂正と追加」として四件も収録している。日々の調査やさまざまな業務でご多忙の中、原稿執筆にご協力いただいた各調査機関の方々に心から御礼申し上げたい。遺跡名、出土点数などは別掲一覧表の通りであるが、時代別の内訳は、古代一七件、中世二二件、近世三四件、近代二件、その他・不明二件（時代をまたがるものは古い時代として計上）となっている。近年の傾向の中では、近世の事例に恵まれたと言える。また、木簡新出土遺跡は六〇件であり、七五%を超える。木簡の出土がますます広がりをみせていることになり、情報収集に一層努めることが重要となろう。一方、純粹に二〇〇七年出土のものは三九件であり、約半数である。速報性の点からは問題かもしれないが、時間をかけて検討した結果であつ

たり、過去の出土例を丹念に追跡した結果であるとすべきであろう。これらすべての資料は、たとえ文字が釈読できなくとも、その遺跡で文字を使った何らかの営みがあったことを示すものであるから、等しく価値を有するものである。従って、本来は取捨選択にならないが、紙幅の都合もあるので、全体の傾向と筆者の関心に従い、時代順に注目すべきものを取り上げて概要を紹介していくことにしたい。

七世紀の木簡が発掘された遺跡として、まず奈良県石神遺跡が挙げられる。当遺跡は、文献史料の少ない時代にあつて、継続的な調査により、貴重な知見を提供し続けている。五十戸制下の養米付札、代制に基づく地積を記したとみられる木簡など、七世紀木簡として特徴的なもののほか、人名を記す贅の荷札木簡が出土していることが注意される。

また、奈良県安倍寺跡では、五十戸制下の荷札木簡とともに、塔の造営に関わる木簡が出土している。ここでは造営や手工業に関係する遺物も伴出しており、出土地の性格を踏まえ、総合的に理解する必要がある。